2022年12月11日  川越教会

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　丸山　勉

大いなる語りかけ

［ルカによる福音書1章26～38節］

六か月目に、天使ガブリエルは、ナザレというガリラヤの町に神から遣わされた。ダビデ家のヨセフという人のいいなずけであるおとめのところに遣わされたのである。そのおとめの名はマリアといった。天使は、彼女のところに来て言った。「おめでとう、恵まれた方。主があなたと共におられる。」マリアはこの言葉に戸惑い、いったいこの挨拶は何のことかと考え込んだ。すると、天使は言った。「マリア、恐れることはない。あなたは神から恵みをいただいた。あなたは身ごもって男の子を産むが、その子をイエスと名付けなさい。その子は偉大な人になり、いと高き方の子と言われる。神である主は、彼に父ダビデの王座をくださる。彼は永遠にヤコブの家を治め、その支配は終わることがない。」マリアは天使に言った。「どうして、そのようなことがありえましょうか。わたしは男の人を知りませんのに。」天使は答えた。「聖霊があなたに降り、いと高き方の力があなたを包む。だから、生まれる子は聖なる者、神の子と呼ばれる。あなたの親類のエリサベトも、年をとっているが、男の子を身ごもっている。不妊の女と言われていたのに、もう六か月になっている。神にできないことは何一つない。」マリアは言った。「わたしは主のはしためです。お言葉どおり、この身に成りますように。」そこで、天使は去って行った。

 [１] ロマンティック・クリスマス？

クリスマスというのは、どうも一般的にはロマンティックなイメージというものがくっついているように思います。夜の街路樹に飾られるイルミネーション、またチラシ配りなどしていて気づいたのですが、意外と多くのお家の玄関の扉におしゃれなリースが飾られていました。そしてショッピングモールの中やホテルのロビーなどには大きなクリスマスツリーが置かれ、クリスマスのイメージを作っているように思えます。そういうものを見たり触れたりすると、私たちも不思議と心が和んだりします。けれども、そういうロマンティックなクリスマスのイメージというのは、どこかファンタジック（幻想的）な気もしてしまうのです。世知辛い世の中ですから、ファンタジッククリスマスも悪くはないのかもしれませんが、ただ少々気になってしまうこともありまして、それは、聖書のクリスマスの物語もファンタジック、ロマンティックなものとして捉えてしまいがちになってはしまわないか、ということです。もしそれだけであるのなら、今日の聖書箇所で天使ガブリエルがマリアに告げた「あなたは身ごもって男の子を産む」という知らせも、いかにもおとぎばなしのような、現実離れしたお話というように捉えられかねません。

[2] 神による第二の天地創造

 先週ご一緒に見ました聖書箇所のエリサベツ（マリアの親類であった）は、老年になってから祭司職である夫ザカリアとの間に子どもを宿しました。実はこれも天使ガブリエルのお告げが現実になったことです。今日のマリアの方はと言えば、「ダビデ家のヨセフという人のいいなずけであるおとめ」です。以前の訳では「おとめ」ではなく「一処女」と訳していたと思います。ですからこの後マリアが戸惑い、「わたしは男の人を知りませんのに」とありますが、本当にまだ幼さが残るようなマリアだったのです。そのマリアが、天使のお告げによって（つまり神様のご意志が働くことによって）予想だにしない人生をその身に負って生きるということが、ここから始まったのです。どこがファンタジック、ロマンティックなのでしょう。今の感覚で言うなら、望まない妊娠を背負わされた一人の少女の話です。周囲の人との関わりを考えたら死になくなるような、厳しいリアルな出来事ではないでしょうか？

　このマリアはイエスの母となるわけですが、この天使が神様の言葉を預かってマリアに直接語るということから聖書はこの物語を告げています。その意味はとても大きいものだということを思うのです。あの神学者カール・バルトは、この箇所の説教の中で「私どもは、天使のマリアに対する挨拶が、私どもに知らされないままに終わることもあり得た人間としてこれを知らせて頂いている」と語っています。確かにこの天使のお告げがもしかしたら私たちに知らされないことだってあり得たのです。けれどもよくぞこの言葉を聖書はきちんと記してくれた！そのことを私たちは感謝したいと思います。いきなりマリアは聖霊によって子を宿した（妊娠した）訳ではないのです。はじめに、天使の（つまり上からの）言葉があったのです。第一声はこうです。「おめでとう、恵まれた方。主があなたと共におられる」（1:28）。神の使いは、マリアを祝福しています。皆さん、聖書が祝福を告げるというのはどこから始まっているでしょうか？そう、創世記の万物創造の場面です。とりわけ人間の創造に関して、「神はご自分にかたどって人を創造された。男と女に創造された。神は彼らを祝福して言われた。「産めよ。増えよ…」」（創1:27～28）と記しています。神様は言葉をかけられることによって、その対象となるものを祝福し、創造的御業をなすのです。このマリアに語られたお告げについて、このように言うことも許されると私は思います。―神様は時満ちて、今マリアを‟神の母”とする、第二の天地創造、この世界の新創造をなしたのだ、と。

[3] 「命」と「言葉」

　ちょっと横道にそれますが、が、私は最近、松居 直（ただし）さんという、先月11月に天に召された「福音館書店」の元社長であった方が残された言葉に触れてハッとさせられたのです。そのことが今日のマリアへの語りかけと繋がっているなと思ったのです。松居直さんは生涯主を信じる信仰を持ち続けた方ですが、様々な愛され続けている絵本を世に送って来られ、その中で「人間にとって言葉とは何なのか」を問い続けて来られた方です。以下、松居さんの言葉です。

　「私たちは母親から「命」をもらいましたよね。

そしてその命の器の「からだ」をその時もらいましたよね。

もちろん、母を通して神様が下さるんですけれども。

それから「言葉」をもらいましたよね。言葉っていうのは、命を支えるものです。

それが人間の最初だったんです。

そこには、母親と赤ちゃんは一緒にいたんです。

ま、時にはお母さんに代わる方の場合もありますけれども。

「命」、「からだ」、「言葉」その３つのものをもらった。そのことの意味です。

命と言葉とは切れないもの、一つのものです。それを「体験」したんですよ。

そして「共にいる」ということも体験したんですよ。一人ではないんです。」

松居さんは、赤ちゃんという存在は、母親の胎から産まれ出た時に、まずその母親からの言葉、祝福の言葉を受けて産まれてくる、と言うのですね。そしてその時母親と赤ちゃんは一緒にいた。（産れ出る前から一体ですね）。その「一緒にいる」ということの深みは、「語りかける、語りかけられる」という関係性の中にあるということなのだ、と仰るのです。これに私はハッとしました。「命の誕生」とは、まことに神秘なことなのですけれども、偶然ではないのです。「言葉」がかけられることと、その新生児が生まれるということ、「無」から「有」が生まれるということは切り離すことが出来ないこと。だから「神は言われた。「光あれ」。こうして、光があった」（創1:3）とありますよね。天使はまずマリアに、「おめでとう、主があなたと共におられます」（ルカ1:28）語ったというのは、言ってみれば、神様が最初に人間に接する、その接し方なのだと思います。このマリアへの言葉、「おめでとう、恵まれた方」というのは、いのちを育む者に対して、そしてすべて命与えられた者に対する神ご自身からの祝福の言葉であり、その祝福を私たち人間は信じることが大切だ、何故なら私たちは神様の思いからはかけ離れてしまっている存在なのだから、というようなことを、先のカール・バルトは説教で語っています。

［4］ 神様に委ね切って

31節以下。天使は言いました。「その子をイエスと名付けなさい。その子は偉大な人になり、いと高き方の子と言われる。神である主は、彼に父ダビデの王座をくださる。彼は永遠にヤコブの家を治め、その支配は終わることがない。」 この「永遠に」ということに私たちの救いがかかっていると思います。単にダビデ家の血統であるのなら、それは人間の血筋です。しかし、このお方は、いと高き方の子、イスラエルから始まった神様の契約は決して無くならない。永遠に統べ治めらるお方として、時代も人種も、勿論性別も超えて人間を祝福されるお方としてこの方は生まれるのだと。ですからこのお方は、人間の手を超えて、ただ聖霊によって生まれるのだ、と天使は言うのです。それでは、ではなぜマリアという人を？―その問いは、神様は何故私をこの地上に産まれさせたの？という問いと同じだと思うのです。神様は、御子イエス様を私たちのための救い主としてお与えになることによって、「おめでとう、恵まれた方！」と言って下さっているのです！おめでとう、あなたは幸いだ！と。

その「幸い」とはどんな幸いでしょうか？詩編32編の言葉を思い起こして頂きたいと思います。―「いかに幸いなことでしょう。背きを赦され、罪を覆っていただいた者は。いかに幸いなことでしょう。主に咎を数えられず、心に欺きのない人は。」（32:1～2）。そう、神様が、主イエスの十字架に免じて、私たちの罪を覆って下さり、私たちの咎の数々を数えることはもう出来ないと仰って下さっているのです！主のみ言葉は、私たちの罪よりも、私たちの過ちよりも遥かに大きいのです。この神様のなさり方に、私たちは自分自身を預けて良いのだと思います。信頼して良いのですね。マリアは、自分の人生を引っくり返された女性です。しかし、神様の方から言葉をかけられて、それを思い巡らし、そしてそれを自分事として受け入れました。その時、彼女の心に賛美が沸き起こって来たのですね。本当の喜びが生まれた。私たちもマリアが語った言葉をなぞって、この人生を神様に委ね切って行きたいと思います。「私は主のはしためです。お言葉通り、この身になりますように」（ルカ1:38）。誰にも言えない、私たちの思いの最も深い所、低い所にくだって来て下さった主イエスが永遠に共におられるのですから！お祈り致します。

主なる神様、今日の礼拝を感謝致します。クリスマスとは幻想的なお話ではありません。あなたが私たち一人ひとりを目がけて言葉をかけて下さるリアルな出来事です。主イエス様は、神様の言葉そのものです。そのようにしていつも私たちと関わって下さいますから感謝致します。マリアの大胆な告白、それを聖霊によって、私たちの告白ともさせて下さい。主イエス様の御名によって祈ります。アーメン。